

# カットグラスの花瓶

岡田 静子

昭和六十一年六月五日朝日新聞紙上で西川政一様御他界の事を知り驚きました。日商岩井の基礎を築かれ、又バレーボールの今日の隆盛を築かれたスポーツマンであられたと承わつて居ります。まことに惜しい方を亡くされ、日商岩井、たつみ会の方々もどんなにお

嘆きかとお察しいたします。

西川様の大奥様に、亡夫の妹富美子は大変お世話になりました。私が大奥様と申し上げるのは西川文蔵様の御夫人です。亡夫猪太郎二十二才の九月父が亡くなり、高知高等女学校一年の富美子とその下の小学校六年の妹をつれて神戸へ帰つて来たので



S. 39. 9. 21  
於・神戸舞子ヴィラ  
岡田猪太郎(63)  
村田 寿満(58)  
半田 みつ(60)  
小泉ひとし(60)  
富田貴代子(63)  
古出 よね(67)

す。大奥様は両親を失つた少女をあれと思われ、御自宅に引取り、女中見習いをさせて頂きました。そして親和高等女学校へ編入の手続きをして頂き五年間通わせて頂きました。大奥様はお心の広いおやさしい方であられたと承わつて居ります。二人の女中さんが居て、色々家事のお手伝いをい

たしましたが、二人とも決して蔭でいじめる様な事は全く無く、履物のぬぎ方、揃え方、シーツの洗い方、かけ方、物の煮方など、見よう見まねで黒豆まで炊けるようになりました。又夜は八時になれば、お客様があつても、台所がどんなに忙しくても自分の部屋にさがつて勉強をする様にと、机まで置いて下さったのです。其の頃女学校では、裁縫の教材に、一つ身、四つ身、女物着物、羽織、長襦袢、帯、男物単衣、袴、羽織、最後は男物袴まで全部大奥様のおみはかりで、用意して頂きました。なかなか母のある少女でもこれだけのものを学校にもたせるのは並大抵の事ではなかったのです。

あやまちがあつても決してお叱りにはならず、静かにおさとしになつたと聞きました。亡夫も妹も大そう感謝して勿体ない事だとして居りました。

私は西川政一様にお目にかつた事はありません。或る日神戸大丸デパートから、西川政一様より貴重品扱いの品が届きました。主人の帰宅を待ち二人であけました。何と高価なカットグラスの花瓶でした。口径七糎、高さ十六糎、回

り五十糎、底径七・五糎のどっしりと重く、黒味を帯びた紫色の縦形の波模様で、私共には物体ない立派な花瓶でした。

御長男御誕生の御内祝品として送られてきたのです。どの様なお祝い品を差し上げたのか私には知る由もありません。六月に生まれながら、六月はジュンというので「じゅん」と命名したとお手紙もはいって居りました。主人はこの花瓶を大切にいたしました。私はこの花瓶に、花菖蒲、紫陽花、ダリア、菊、桔梗、萩など挿して楽しみ大事にいたしました。薔薇を活けると最もふさわしいのでした。

老若男女貧富の差別なく、或は除々に、或は突然に死はやつて来ます。生ある物は必ず歿すとやら。西川政一様はまことに御立派な一生をお過ごしになりました。惜しみても惜しみても尽きません。

昭和二年四月西川政一様御結婚の、和洋装二枚の記念写真を頂いて居ります。私はこのお写真を床の間に飾り、カットグラスの花瓶に、庭に咲いていた六月の薔薇を挿し、一人でよ、と泣きました。今は只謹んで御冥福をお祈りいたします。

本部六十一年秋季例会に参加してよみがえった――

## 『苦しき思い出、淡路行』

岡本 志良

十月十六日、神戸須磨港からフェリーで淡路島に渡り、新設成った大鳴門橋を通過して四国の地に足跡を印した秋の旅は、雄大な大自然と、進んだ技術の造形物を一望出来た大満足の旅であった。私がこの旅行に参加した理由は、鳴門の外に淡路島の先山(せんざん)の姿を見たかったためである。

先山(海拔四四八米)は洲本港の西四キロ位にとんがり立って、淡路富士とも呼ばれている信仰の山である。頂上付近は老木と伽藍が立ちならんでいて、遠く四方から望むことが出来る。

お寺は千光寺と称し、淡路西国第一番札所及び十三仏霊場第一の名刹で、今も島民の信仰を集め、大晦日には大勢がこゝに登り、無病息災を祈るし、人の死後三五日には、この寺へ詣つて団子を谷へ転がし、遺髪を六角堂へ納めるとかで、広く知られている。

因みに本尊は、千手観世音菩薩及び不動朝王(西歳生れの守本尊)である。

思えば大正末期であった。鈴木商店黎明会は、例会として海を渡り淡路の古寺参詣を企画した。早朝出発、洲本港に上陸し先山に参詣して午后、船便で神戸に帰

る予定であった。

ところが先山から洲本港に帰つて来たら、荒天のため欠航になった旨知らされ、苦しき思い出の淡路行が始まった。

当日は日曜日であった。若しその日のうちに帰神できない時は、参加者全員、月曜欠勤となる。

ところが当時は、自動車は全く勿論バスもない。歩いて明石の対岸岩屋まで歩くより方法がないが、その距離は三〇キロは充分あるので、尋常な状況ではなかった。不可能に近い行程である。と云つて他に方法がない。若さ(18才、19才?)のせいであつたか、意を決して歩くことにした。

企画引率責任者として、苦しかった当時の気持は六十余年を過ぎた現在でもはつきり残っている。総員二〇数名のようであつたと思う。勿論先輩の方々も居られたと思うが、全くお名前が浮ばな

い。

多分皆さんの御理解を得て歩き出したが、道は海岸線に沿って伸びており、遠く岬が海に浮いているように見え、漸くその岬を廻ると又同じような岬が遠くに現われる。このくり返しが、気持をがっかりさせた覚えがはつきりと残っている。

どうしても歩けない人には荷車を借りて乗せた。食事をどうしたかノバラバラに歩いたのか全く覚えていない。皆さんの忍耐と気力に助けられ、一名の落伍者もなく暗くなつて岩屋についたと思う。季節は覚えていないが多分。割合日の長い頃であつたらう。

最後の難関明石海峡を渡るのに、渡船は既になく、八方手をつくし、ようやく船を見付けることが出来た。三拝九拝して臨時に出航してもらえたのは魚の運搬船(前部が魚積倉庫、後部にエンジン室と操舵室)であつた。